

民族史の記録とその意味—アステカの事例を中心にして—

井関 瞳美（明治大学）

1. はじめに

本報告では、アステカ王国（後1428-1521年）の民族史観を反映する物質文化、すなわち記録媒体としての石彫記念碑を分析対象とし、その図像表現や使用方法の分析から、民族史の記録の意味と機能について考察する。アステカ王国は、メソアメリカ史上最後に繁栄を極めた王国であり、メキシコ盆地を中心にメソアメリカ一帯に影響力を及ぼした。100年にも満たない短期間の王国史において、その急速な勢力拡大を実現した社会的要素が戦争であった。そのため戦争は民族史を構成する主要な要素の一つとなっている。

本発表では、アステカの事例をより顕在化させるため、先行するメソアメリカ文化の中でもとくに特徴的な記録媒体を有する、古典期後期のマヤ都市ヤシュチランとメキシコ中部の都市カカシュトラの記録媒体を比較分析していく。ここでは、記録媒体がどのような意図で制作され、どのように人々に受容され、どのような心理的効果を発揮する可能性があったか、という視点からアプローチする。

2. 民族史と記録媒体

「歴史」には二つの捉え方がある。その一つが「出来事の総体ないし継起としての歴史」で、もう一つが「現在時における過去の出来事に関する語りとしての歴史」であると言われている〔安村2006〕。本発表では、後者の中でも自民族の過去を語った物語を「民族史」と呼ぶこととする。つまり民族史とは、その民族が自分たちを取り巻く「世界」をどのように認識しているかを反映するものである。そのため民族史は、環境の変化に伴い常に再編されるものもある。

メソアメリカ諸文化において、記録された歴史事象には、戦争や戦勝以外にも、王の誕生や結婚、即位、他都市からの支配層の訪問などの歴史的出来事、そして神話的世界觀や伝説などが含まれる。またそれらを記した記録媒体には、石版彫刻（ステラやリンテル）、壁画、石彫、土器や絵文書がある。本発表では、民衆を含むより多くの人々に経験された可能性がある公共性の高い記録媒体として、おもに建物外に設置された石版、壁画、石造記念碑を取り上げる。

一般的な傾向として、記録媒体の表現様式には地域差がある。とくにメソアメリカでも確立された文字表記を有していた古典期のマヤ地域では、マヤ文字と図像との組み合わせで暦や王の名前を記載した個別の歴史的事件の記録が多く観察される。一方で、その他の地域では、暦を記録しているのは絵文書など限られた支配層に共有される記録媒体のみである。メキシコ中部においては、公共のコンテキストで暦を表示するようになるのは古典期以降であり、具体的な事象を記録する試みは後古典期後期のアステカ文化以外にはほとんど見られない。

3. メソアメリカの戦争の特徴

メソアメリカの「戦争」には、世界史上の様々な戦争と同様に、政治的・経済的・宗教的因素が混在していた。しかし戦闘の様式においては、火器を使用した破壊や虐殺を目的とするような戦争とは大きく異なり、武器は木製の棍棒、盾、槍、弓と矢などに限られていた〔Hassig 1992; 井関2014〕。メソアメリカ文化圏には金属器や車輪、荷駄獸の存在などが欠如していたため、武器や装備の運搬を伴う遠隔地への遠征や火器による大量破壊は現実的ではなかったと考えられる。また戦争自体の目的が、一時的にでも敵を屈服させ、政治的優位性を示すことや貢納品を納めさせることだったため、敵の都市や民衆はなるべく現状を維持する必要があり、必然的に戦闘自体は重視されなかった〔井関2014〕。絵文書や壁画などの描写から、戦士の階級は、生きた捕虜の獲得数が基準となっていたことが分かっている〔Aoyama 2016; 井関2014〕。そのためメソアメリカの戦争に関わる記録は、戦場での戦闘の情景ではなく、戦勝の

記念碑や戦後の祭儀という形で顕在化され、そこに支配層の意図する自民族観が反映されたと考えられる。

4. 特徴的な記録媒体の事例

ここでは、記録の記号化と反復性、および図像表現の動画的効果を考察するために、ヤシュチランの石版彫刻とカカシトラの壁画について分析する。

4-1. ヤシュチランの石版彫刻

ヤシュチランは、パレンケ南東のウスマシンタ川沿いの河岸段丘に位置し、古典期を通してウスマシンタ地域の中核的な都市であった。この都市遺跡からは、110以上の石彫記念碑と120以上の建造物が発見されている [Tate 2001: 360]。ヤシュチランは、同時代のマヤ都市と比較しても類を見ないほど多くの石版彫刻（リンテル、ステラ、階段彫刻など）を残していることが特徴である [Tate 2001: 360]。石版の多くは、王権と戦勝をテーマにしたものであり、王の出陣に関する儀礼や、勝利と捕虜の獲得といった歴史的事象が、王と王妃、王と捕虜のように2~3名程度の人物像と、判別しやすい少数の文字のみでパターン化され、記号的に描写されている（図1）。

記号化された石版彫刻を大量に制作し始めたのが、シールド・ジャガー三世王（在位681-742年）であると言われている [Tate 2001]。シールド・ジャガー三世は、60年以上にもおよぶ治世の間、数々の戦争に勝利しウスマシンタ川流域を広く支配下に治め、自身の功績を積極的に石版彫刻に記録した [Evans: 2008]。ヤシュチランの全盛期を支えた後継者のバード・ジャガー四世王（在位752-768年）も、治世は短かったものの、自分自身の功績の記録と王権の正当性の顯示のため、先王に倣った石版彫刻を多く残している。このように継続的かつ大量にパターン化して判読しやすい王権や戦勝の意味をアピールする反復性には、広く民衆に王権の価値を認知させる効果があったと考えられる。

4-2. カカシトラの壁画

カカシトラは、メキシコ中部のプエブラ＝トラスカラ高原に位置し、古典期後期に最盛期を迎えた都市である。その主要基壇上の公共建造物からは多くの壁画が発見されており、大部分は他地域文化との折衷的な美術様式で表現された神話的情景を表現している [Brittenham 2015]。

そのうちの一つに特異な存在として、アクロポリス上の「建造物B」の正面スロープ（タル一部分）一面に、ほぼ等身大の激しい戦闘シーンを描写した「戦闘の壁画」（後8~9世紀初頭）がある（図2）。この壁画は、実際の戦闘、戦闘後の捕虜の生贊、戦勝記念として行う戦闘を再現する儀礼、などの場面を意図的に混在させ、勝利の栄光を効果的に表現していると解釈されている [Brittenham 2015]。このような戦争に関わる情景の重複的な表現法は、様式は全く異なるが、後述するアステカの「剣闘士の生贊」（戦勝記念碑）に通じるものがあるとも考えられている [Brittenham 2015]。

最近の考古学調査によると、この壁画は非常に短期間しか掲示されなかつたか、または全てが描画される前にすでに部分的に壁が上塗りされ始めていた形跡が認められている [Brittenham 2015]。その理由として、少なくとも2点が考えられている。すなわち、一つ目は戦勝と結びついていた為政者の失脚または死亡、そして二つ目は、直接的な暴力表現や、複雑すぎる時間性や思想表現が公共の記念碑として受け入れられなかつた可能性である [Brittenham 2015]。記号的な傾向の強いメソアメリカ美術様式の中では珍しいカカシトラの壁画の表現法を考慮すると、後者の可能性は高いと見られる。

5. アステカの石彫記念碑

アステカの戦争の記録媒体の特徴としては、記号的な図像表現の反復性と、儀礼における装置としての機能である。ここでは、コヨルシャウキ女神の石彫と戦勝記念碑を取り上げる。

アステカの戦勝を表す図像は、ヤシュチランに見られたように、情景としてではなく勝利や敗北といった結果のみが記号的に表現された。コヨルシャウキ女神の石彫は、神話的・伝説的な戦争の神・ウィ

ツィロポチトリに対する敗北を体現する記号として、繰り返し同じ場所に設置され続け、生贊の儀礼の象徴的装置として使用された。また戦勝記念碑には、戦勝者が敗北者の髪を掴んでいる姿で表現され、この記念碑自体が「剣闘士の生贊」の舞台となった。

5-1. コヨルシャウキの石像

コヨルシャウキは、神話や伝説ではウィツィロポチトリに対する反抗勢力の運命の体現者として描写されている。現時点ではテノチティランの主神殿テンプロ・マヨールからは、コヨルシャウキ像は3点出土しており、IVa期、IVb期、V期以降に属すると考えられている〔Matos Moctezuma 1991〕(図3)。IVa期は、テノチティランを中心に三都市同盟が結成され、実質的にアステカ王国が拡大し始める時期に相当する。

すべてのコヨルシャウキ像は、体をバラバラに切断された状態で表現され、ウィツィロポチトリ側の基壇に位置している。IVa期は装飾の少ないシンプルな漆喰像であり、その真上のIVb期には図像が複雑化した円形石版が据え置かれている。V期以降と推測されているものは、石像彫刻の4つの断片のみであるが、元々はIVb期のもののように円形の石版を構成していたと考えられている〔Matos Moctezuma 1991; López Luján 2010〕。女神の図像はさらに複雑化し、太陽信仰に関連する神話的モチーフで装飾されている。戦場で捕らえられた捕虜は、戦争の神であり太陽神でもあるウィツィロポチトリへの生贊として、頂上の神殿で神官たちによって心臓を引き抜かれた後、階段を転げ落ち、階段下で神官たちによって体をバラバラにされ、コヨルシャウキと同じ運命をたどった。

アステカの戦争には、太陽神のエネルギー源となる生贊の獲得を目的とした宗教儀礼としての機能があり、継続的な生贊獲得の必要性が、実際には政治経済的な王国拡大とも結びついていた。そのため王国の拡大に伴い、3点のコヨルシャウキ像の図像も複雑化しており、これは戦争を正当化する太陽信仰が重要化する過程を示していると考えられる。女神の切断された体という図像表現の記号化とウィツィロポチトリ神殿の麓という設置場所のパターン化や反復性は、ヤシュチランの石版と同様に、王国の勝利を繰り返し強調する通時的な装置になっていたんだろう。

5-2. 戦勝記念碑

ここで取り上げる戦勝記念碑とは、「モテクソマ一世の石」と「ティソックの石」と呼ばれる2点の円柱型の大型石彫である。どちらも、側面に各王が征服した諸都市に対する勝利が「敗者の髪を掴む勝者」の様式で彫刻され、上面には光を放つ太陽盤が描かれている。

この石彫は、「剣闘士の生贊」という儀礼において戦闘と人身供儀の舞台として使用された。この儀礼では、簡素な装備しか持たず片足を石台の中央に設置した棒に固定された捕虜を、4人の壯麗に武装したアステカの戦士と戦わせた。最終的に捕虜はその石台の上に仰向けにされ、神官たちによって心臓を引き抜かれ、上面の太陽に捧げられた。

これらの石彫は、太陽信仰とそれを支える戦争、戦場での戦闘、生贊の必要性など、実際の戦争に関連する事象と背景となる神話や思想が、時空を超えて一体化する装置でもあった〔井関2017〕。その点では、カカシュトラの壁画のように、重層的な時間を表現した一例とも言える〔井関2017〕。

6. まとめ

アステカの戦争は、劇的な変革や破壊を意図するものではなく、政治・経済・宗教が有機的に連動したアステカ社会を維持し、王国の民や被征服都市に繰り返しアステカ王国運営上のルールを体験的に確認させるために、必要不可欠な社会制度として機能していた〔井関2014〕。そのためアステカの戦争関連記念碑は、マヤのように特定の戦勝を伝達する性質は本質的にはほとんどないと考えられる。アステカの表現法では、戦争を成立させている背景の思想（神話・伝説）は、まずはコヨルシャウキ像や太陽盤のように記号化し二次元の図像として表現された。しかしその機能は、人身供儀で機能を果たす装置として三次元化し、儀礼で使用されることで神話・伝説と現世を織り交ぜた四次元のレベルで民衆や儀礼

に招待された周辺諸国の支配層に直接経験された〔井関2017〕。アステカの例は、ヤシュチランのリンテルのように記号の反復表現でありながら、カカシュトラの壁画が目指した時間的な重層性を実現していたと言えるだろう〔井関2017〕。そしてこの伝達形態は、王国の拡大にも大きく貢献したことと考えられる。

参考文献

- Alcina Franch, J., M. León-Portilla, and E. Matos Moctezuma, eds. (1992) *Azteca-Mexica*. Sociedad Estatal Quinto Centenario, Mexico.
- Aoyama, K. (2016) Warfare, Warriors, and Weapons. In W. R. T. Witschey (ed.) *Encyclopedia of the Ancient Maya*, pp. 376-379. Rowman & Littlefield, Lanham, Boulder, New York, London.
- Berdan, F. F. and P. R. Anawalt (1997) *The Essential Codex Mendoza*. University of California Press, Berkeley.
- Brittenham, C. (2015) *The Murals of Cacaxtla. The Power of Painting in Ancient Central Mexico*. University of Texas Press, Austin.
- Cué, L., F. Carrizosa, and N. Valentín (2010) El monolito de Coyolxuhqui. Investigaciones recientes. *Arqueología Mexicana*, Vol.XVII, No.102: 42-47.
- Duran, D. (1984) *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de la Tierra Firme*. Vol. I, II. Editorial Porrúa, Mexico.
- Evans, S. T. (2008) *Ancient Mexico & Central America. Archaeology and Culture History*. 2nd Edition. Thames and Hudson, London and New York.
- Hassig, R. (1992) *War and Society in Ancient Mesoamerica*. University of California Press, Berkeley, Los Angeles, and London.
- 井関陸美 (2010)「アステカ王国拡大期におけるコヨルシャウキ女神の図像変化」『古代アメリカ』第13巻:41-52
- 井関陸美 (2014)「古代アステカ社会における『戦争』の機能」『明治大学教養論集』通巻499号: 1-20
- 井関陸美 (2016)「古典期マヤ文化の記録媒体：パレンケ、ヤシュチラン、ボナンパクの比較研究」『明治大学教養論集』通巻518号: 1-20
- 井関陸美 (2017)「民族史再編と世界観の変容」『明治大学人文科学研究所紀要』第80冊: 35-69
- López Luján, L. (2010) Las imágenes de Coyolxauhqui. *Arqueología Mexicana*, Vol.XVII, No.102: 48-54.
- Matos Moctezuma, E. (1991) Las seis Coyolxauhqui: variaciones sobre un mismo tema. *Estudios de Cultura Náhuatl*. Vol. 21: 15-31.
- McEwan, C. (1995) *Ancient Mexico in the British Museum*. British Museum Press, London.
- Quiñones Keber, E. (1995) *Codex Telleriano-Remensis*. University of Texas Press, Austin.
- Scherer, A. K., and C. Golden (2014) War in the West. History, Landscape, and Classic Maya Conflict. In A. K. Scherer and J. W. Verano (eds.), *Embattled Bodies, Embattled Places. War in Pre-Columbian Mesoamerica and the Andes*, pp. 57-92. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Sharer, R. J. (2006) *The Ancient Maya*. Sixth Edition. Stanford University Press, Stanford.
- Sheets, P. D. (2003) Warfare in Ancient Mesoamerica. In *Ancient Mesoamerican Warfare*, edited by M. K. Brown and T. W. Stanton, pp.287-302. AltaMira Press, Walnut Creek.
- Solis, F. (1992) El temalacatl-cuauhxicalli de Moctezuma Ilhuicamina. In J. Alcina Franch, M. León-Portilla, and E. Matos Moctezuma (eds.) *Azteca-Mexica*, pp. 225-232. Sociedad Estatal Quinto Centenario, Mexico.
- Tate, C. E. (1992) *Yaxchilan. The Design of a Maya Ceremonial City*. University of Texas Press, Austin.
- Tate, C. E. (2001) Yaxchilan. In D. Carrasco (Chief ed.), *The Oxford Encyclopedia of Mesoamerican Cultures*. Vol. 3: 360-363. Oxford University Press, Oxford and New York.
- Townsend, R. (2009) *The Aztec*. Third Edition. Thames and Hudson, London.
- 安村直己 (2006)「権力・メディア・歴史実践—グローバル化と植民地期メキシコにおける歴史の生産—」『歴史学研究』増刊号 No.820: 2-11 青木書店

図版

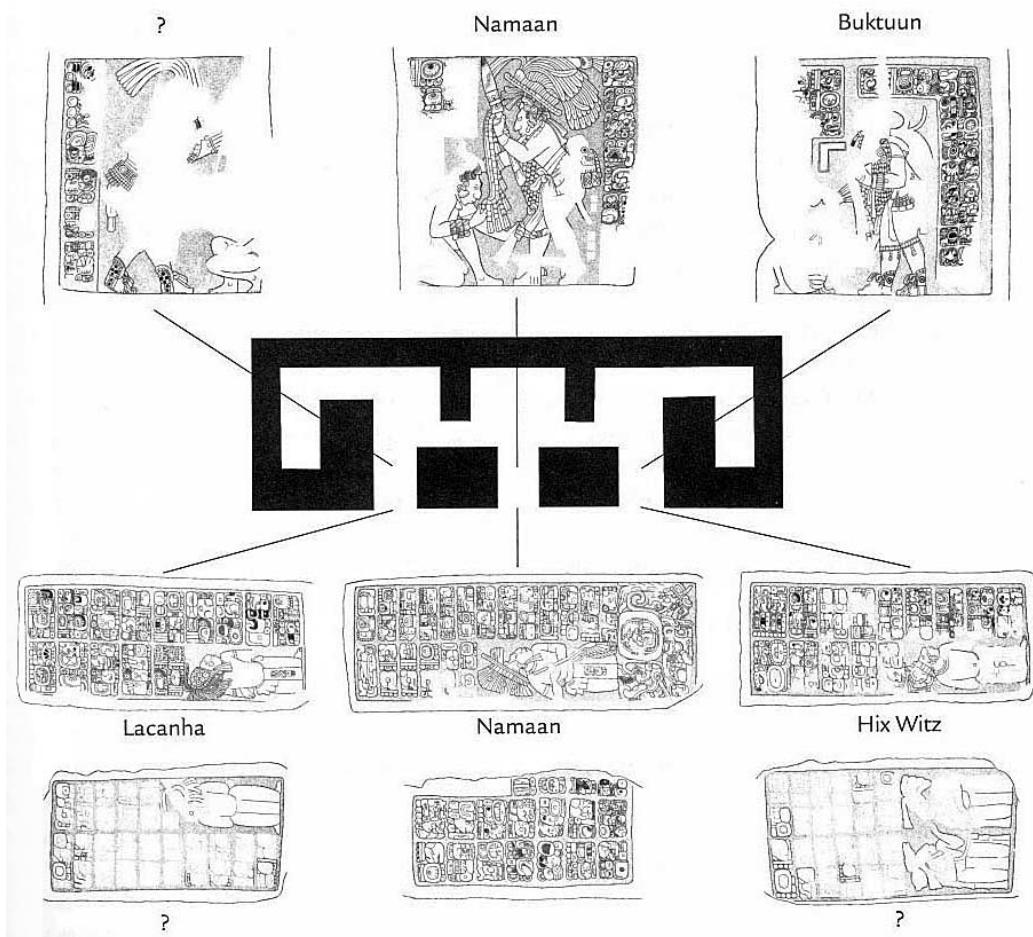


図1 ヤシュチランの「建造物44」のリンテルと階段彫刻の位置 [Scherer and Golden 2014: 79]

中央の黒枠は「建造物44」の構造を示している。上段の図像がリンテルの線画で、Namaan や Buktuun は征服した都市の名前を表す。下段は階段に彫刻された戦勝の記録。Lacanha, Namaan, Hix Witz も支配下に治めた都市の名称。

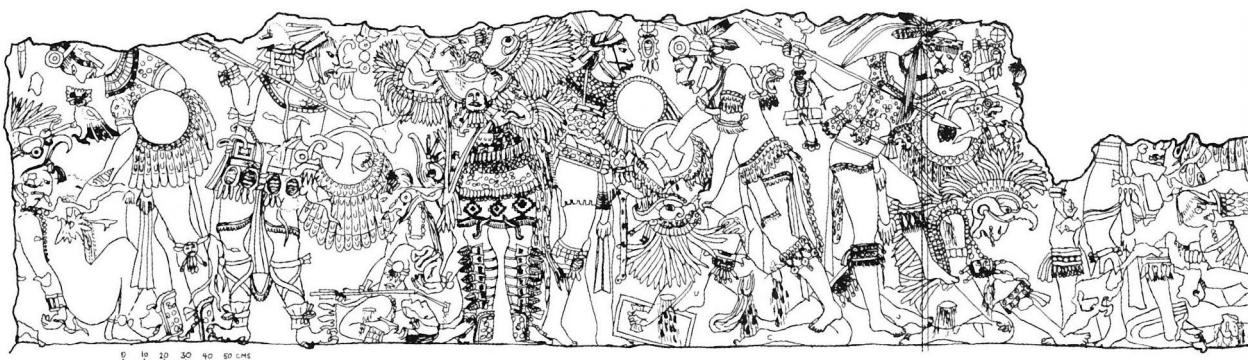


図2 カカシュトラの「戦闘の壁画」(幅26m) の一部の線画 [Brittenham 2015: 112]

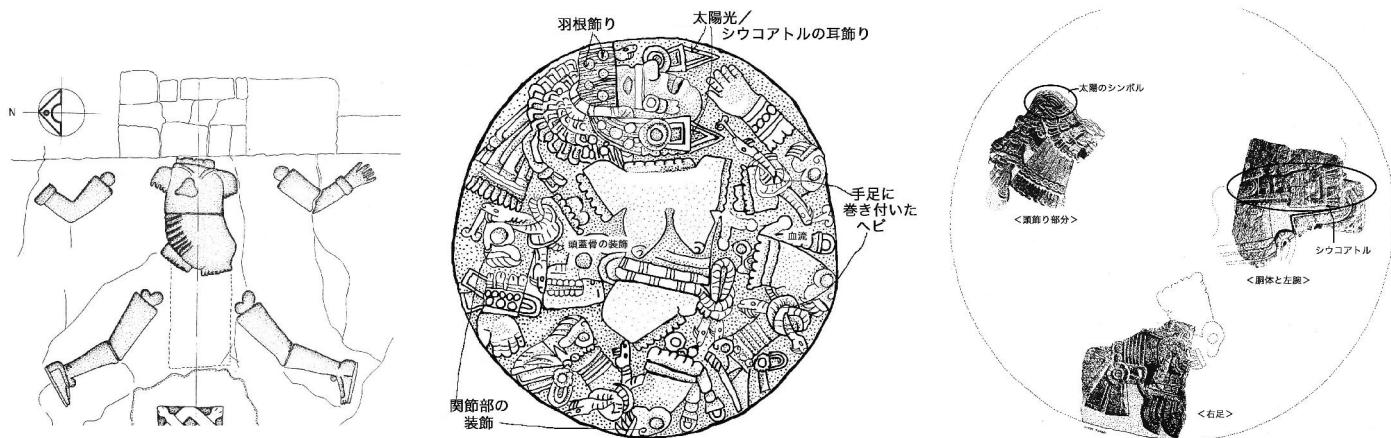


図3 コヨルシャウキ像 左から IVa期（東西 146cm、南北 203cm）、IVb期（直径 304~325cm、厚さ 30cm）、V期以降
(切断された右足 107x99cm、胴体と左腕 134.5x129cm、残り 2片が頭飾り (141x99cm と 97x45cm)
[Matos Moctezuma 1991 より引用・改変]



図4 「モテクソマ一世の石」(直径 224cm、高さ 68-76cm)
上・全体像（メキシコ国立人類学博物館所蔵）、
下・上面の太陽盤と側面の戦勝記録の一部の線画
[Alcina Franch, et al. 1992: 199]



図5 「ティソックの石」(直径 270cm、高さ 90cm)
全体像（メキシコ国立人類学博物館所蔵）
[Alcina Franch, et al. 1992: 200]

メソアメリカ先スペイン期絵文書の研究方法の再検討
～オアハカ州ミシュテカのウィーン絵文書を中心に～

柳澤佐永子

先スペイン期の絵文書

メソアメリカにおいて絵文書の作成がいつ始まったのかは定かではないが、現存する絵文書はすべて後古典期（900年～1521年）作成のものである。ミシュテカ＝プエブラ様式でかかれたものとマヤ文字が使用されているものとの2種類に分類され、前者はさらに、オアハカ州西部のミシュテカ高地地方で作成されたとされる歴史をテーマとした5冊と、作成地が不明の暦や儀式や占いをテーマとした5冊の2種類に分類される。本発表では、この前者のグループのミシュテカの絵文書のみを対象とする。

ミシュテカ地方の絵文書の内容は、主に、10世紀からスペインによる征服までのティラントンゴ王朝を中心としたミシュテカ高地一帯の王朝史である。5冊のうち3冊は両面が使用されているが、各面がそれぞれ独立した内容であるため、おのおのが1つの独立した資料となっている。残る2冊は、元は1冊であったものが、後年、何らかの理由により分けられたものであるので、2冊で1資料とみなされる。また、征服以後の1556年頃に作成されたとされるセルデン絵文書は、西洋の影響が全く見られないため、先スペイン期の絵文書として扱われる。この絵文書は一面のみ使用されており、裏面は使用された形跡が残っているが、すべて消されており、解読は不可能である。以上により、近年の絵文書研究では、ミシュテカの絵文書は、セルデン絵文書も含めた5冊8資料とされている（表1）。また、絵文書の名称は、保管されている土地や機関、初期の所有者、主に研究した人物の名前などから取られているため、その内容とは全く関係がない。

ウィーン絵文書における問題点

ウィーン絵文書は、17世紀後半よりウィーンにあるオーストリア国立図書館に所蔵されているため、ウィーン絵文書、あるいは、そのラテン語読みのビンドボネンシス絵文書と呼ばれている。正式名称は、*Codex Vindobonensis Mexicanus I.*。ヨーロッパに渡った時期や経緯は不明であるが、絵文書に書き加えられたラテン語文の記述の内容と文字のスタイルにより、征服以後のかなり早い時期にはすでにヨーロッパにあったと思われる。シカ科と思われる動物の革を15枚つなぎ合わせ、全長約13.5mを約26cmの幅で折本状にした片面52ページの文書である。両面が使用されており、一面は52ページすべてが先スペイン期の絵文書として使用されているが、もう一面は、両端の各1ページに木製の表紙と裏表紙が貼り付けられ、片側13ページに先スペイン期の絵文書、その反対端1ページには16世紀中旬に記載されたと思われるラテン語のテキストが書かれている。残りの36ページは白紙である。52ページすべてが使用されている面は表面と呼ばれ、もう一方は

裏面と呼ばれているが、明確な理由を示す資料は現在のところ発見されていないので、特に理由はないものと思われる。他のミシュテカの絵文書の表面、裏面という名称に関しても、特に明確な理由があるものはなく、ナットール絵文書に関しては、1970年代に N. Troike により、裏面の方が表面より先に制作されたことが証明されている。

ウイーン絵文書の表面の内容は、ミシュテカ創造神話であるため、記述されている日付はシンボリックなため西暦に換算できない。すべてのミシュテカの絵文書の内容に先行した時代の出来事である。一方、裏面の内容は、ティラントンゴ王朝の創設から3代目までの王朝史で、西暦に換算すると、10世紀から14世紀頃の出来事である。上述したように、各面の内容は一続きではなく、別々の独立した資料である。読み進む方向の構成が違い、別人の手によりかかれているのも明らかである（図1）。

ミシュテカの絵文書の研究は、主に内容や絵文字の解釈に重点が置かれるが、ウイーン絵文書の例にもみられるような各資料の様式のバリエーションにも注目しており、様式と内容とでより正確な作成年代の特定が試みられている。ウイーン絵文書に関しては、表面は、その内容からミシュテカの絵文書の中で最も古いものとされ、1300年頃の作成とされている。一方、裏面は、表面より後に作成されたものとされている。しかし、その根拠は、「表面」「裏面」という名前、内容の年代の順、一方は52ページすべてを使用しているのに対し、もう一方は途中で終わっているので未完成であるなどという、非科学的なものばかりである。それ以上にもっと気になる点は、ウイーン絵文書が語られる時は常に、表面を、熟練された技術の高い人物の手になるもの、裏面は未熟な人物によるものと評価され、熟練された作品はより古い時代のもの、未熟な作品は征服により近い時期のものとされることである。このような主観的な評価は、ミシュテカの絵文書だけでなく、先スペイン期の作品、特に、後古典期後期から植民地初期の作品に多く見られる。

本発表では、絵文書研究において、いかに現代の美術的価値基準による主観的な評価が多用されているかを明確にし、それによる悪影響を指摘し、より科学的な研究方法の確立を検討する。

分析方法

1) ミシュテカ＝プエブラ様式の定義の見直し

マヤの絵文書以外の先スペイン期作成の絵文書は、ミシュテカ＝プエブラ様式でかれている。この様式は、プエブラ＝トラスカラ地方からオアハカにかけての地域で発生し、後古典期後期にはメソアメリカ各地で広範囲にわたって使用された様式である。絵文書の他に、レリーフや壁画、多彩色土器や金銀銅細工、奇跡細工、骨細工、トルコ石や貝のモザイクなど多くの工芸品がこの様式で製作された。しかしながら、ミシュテカ＝プエブラ様式の定義が曖昧であるため、絵文書研究、特に、作成年代の特定に使用するためには、まず、ミシュテカ＝プエブラ様式自体の定義を見直す必要がある。

2) 内容の時間枠と作成年代の分離

先に述べたように、絵文書に書かれた内容の時間枠と作成年代が混同される傾向にある。ウィーン絵文書表面の様に、ミシュテカの絵文書の中には、ミシュテカ＝プエブラ様式が起こる以前の時代の出来事が記述されているものがある。このような絵文書は、その内容の年代は制作年代の特定には使用できないということを明確にする必要がある。これは、内容の時間枠の古い順に作成されたわけではないということの裏付けともなる。

3) コディコロジーの適用

近年、絵文書研究においてコディコロジーの手法が注目されている。これは、かかれた内容や様式だけでなく、シートや絵の具など使用されているすべての材料や制作方法などにも注目し、絵文書を多面的に研究する方法である。これには、第一に原本を見る必要があるが、多くの絵文書は海外にあるだけでなく、閲覧許可を取るのも非常に困難である。しかし、現在は非常に高質なファクシミリ版や、絵文書の原本を観察した報告書、植民地時代作成の絵文書を含めた絵文書作成や構造に関する研究などで、ある程度原本の状態を想像できる。発表者の場合は、幸運にもウィーン絵文書の閲覧許可を得たが、それまでに、上記の様な様々な資料を使って、観察すべき点をある程度絞り、絵文書の構成に関して仮説を立てた。ウィーン絵文書の場合、1963年のADEVA版と1992年のFCE版の非常に高質なファクシミリ版が存在するが、裏面の何も書かれていない36ページはただの白い紙であったため、その部分に含まれる情報は原本を見なければ得られなかった。もし、その部分も他の部分と同様に写真で復元されていれば、もっと多くの情報がファクシミリ版で得られたであろう。絵や文字のかかれている部分だけでなく、作品すべての部分に情報が含まれているということを忘れてはいけない。

結論と考察

ミシュテカ＝プエブラ様式の定義は、1950年代後半以降、H.B. Nicholsonがコンセプトの見直しを図り、検討を重ね、最終的に、土器に関しては、多彩色土器のなかでも絵文書スタイルと呼ばれるタイプのものだけをミシュテカ＝プエブラ様式と定義した。この土器の製作期間は1350年～1550年である。これにより、内容の日付に関わらず、すべての絵文書は1350年以降の作成であることができる。また、記述されている出来事の最終の日付が1350年以降であれば、作成年はその日から1521年までの間となる。よって、ウィーン絵文書表面は、1350年から1521年、裏面は、1400年頃から1521年の間に作成されたことができる。

注意深い観察により、ウィーン絵文書裏面の一部に書き直しを発見した。この書き直しの部分は、裏面の様式のバリエーションとはかけ離れているが、表面の様式のバリエーションに非常によく似ている。このため、裏面の書き直しは表面の作成と同時期に行われた可能性が高い。これは、従来の非科学的な観点に基づく表面と裏面の作成順を覆す発見で

ある。

O. Adelhoferによるウィーン絵文書の原本の観察による報告書とファクシミリ版の観察により、ウィーン絵文書を物質的に3つの部分に分けられることが分かった。この仮説は、原本の観察により確定された。3つのパーツのうちの1つで裏面が白紙である部分の一部にシミのようなものを発見し、これは、セルデン絵文書の様に、元は絵文書として使用されていたのを消去した可能性が高い。これにより、絵文書を作成する際、革を再利用する習慣があった可能性が浮上してきた。

絵文書は、征服以前の伝統的な手法を残しつつ、西洋からもたらされた新しい手法を取り入れ、その制作は征服以降も続けられた。このような資料はメソアメリカの中でも稀有であり、また、植民地以降に作成された絵文書は膨大な点数に上ること、そして、文字資料でありかつビジュアルな資料であるという特殊な性質を持つため、絵文書学という分野ができるほどである。しかし、絵文書学は新しい分野であり、その特殊性のため、方法論が確立されていない。特に、ビジュアルな素材であるにも拘らず、美術史の観点からの研究はあまりなされていない。絵文書には膨大な量の情報が含まれており、そのすべての情報を余すことなく獲得できるような、より科学的な研究方法を検討し、絵文書の研究資料としての価値をさらに高める方法を考察したい。

参考文献

- ADELHOFER, Otto. *Codex Vindobonensis Mexicanus I. Österreichische Nationalbibliothek Wien. History and description of the manuscript*, Graz, Akademische Druck-und Verlagsanstalt, 1963.
- Batalla Rosado, Juan José. “Los códices mesoamericanos: métodos de estudio”, en *Itinerarios: revista de estudios lingüísticos, literarios, históricos y antropológicos*, vol. 8, 2008, pp. 43-65.
- CASO, Alfonso. “Explicación del reverso del Codex Vindobonensis”, en *Memoria de El Colegio Nacional*, tomo V, núm. 5, 1950, pp. 9-46.
- . *Interpretación del Códice Colombino*, México, Sociedad Mexicana de Antropología, 1966.
- DARK, Philip, y Joyce PLESTERS. “The palimpsests of Codex Selden: Recent attempts to reveal the covered pictographs”, en *Actas del XXXIII Congreso Internacional de Americanistas, San José, 20-27 de Julio de 1958*, Costa Rica, 1978, pp. 530-539.
- ESCALANTE GONZALBO, Pablo. *Los códices mesoamericanos antes y después de la Conquista española*, México, Fondo de Cultura Económica, 2010.
- FURST, Jill Leslie, *Codex Vindobonensis Mexicanus I: A Comentary*, Albany, Nueva York, Institute for Mesoamerican Studies, 1978.

- HERMANN LEJARAZU, Manuel A. “Los códices de la Mixteca Alta. Historias de linajes y genealogías”, en *Arqueología mexicana. La Mixteca tres mil años de cultura en Oaxaca, Puebla y Guerrero*, vol. XV, núm. 90, 2008, p. 48-52.
- JANSEN, Maarten. *Huisi Tacu. Estudio interpretativo de un libro mixteco antiguo: Codex Vindobonensis Mexicanus I*, Ámsterdam, Centro de Estudios y Documentación Latinoamericanos, 2 vols, 1982.
- NICHOLSON, H. B. “The Mixteca Puebla Concept in Mesoamerican Archaeology: A Re-examination”, reimpresión publicada en A. Cordy-Collins y J. Stern (eds.), *Pre-Columbian Art History Selected Readings*, Palo Alto, California, Peek Publications, 1977[1960], pp. 113-119.
- NICHOLSON, H. B., y Eloise QUIÑONES KEBER eds. ----- y Eloise Quiñones Keber, “Introduction”, en Nicholson y Quiñones (eds.), *Mixteca-Puebla: Discoveries and Research in Mesoamerican Art and Archaeology*, California, Labyrinthos, 1994, pp. vii-xv.
- SMITH, Mary Elizabeth. *Picture Writing from Ancient Southern Mexico. Mixtec Place Signs and Maps*, Oklahoma, University of Oklahoma Press, 1973.
- YANAGISAWA, Saeko. “Análisis estilístico de un códice mixteco: el reverso del Códice Vindobonensis”, tesis doctoral, México, Universidad Nacional Autónoma de México, Facultad de Filosofía y Letras, 2016.
- <http://132.248.9.195/ptd2015/noviembre/098854556/Index.html>

絵文書ファクシミリ

- Códice Vindobonensis Mexicanus I*. Österreichische Nationalbibliothek Wien, Graz, Akademische Druck-und Verlagsanstalt, 1963 (existe una reimpresión en 1974).
- Códice Vindobonensis Mexicanus I*. España-Austria-México, Sociedad Estatal Quinto Centenario, Akademische Druck-und Verlagsanstalt y Fondo de Cultura Económica, 1992.

1	ウィーン絵文書表面 Códice Vindobonensis anverso	ミシュテカ創造神話 神話時代
2	ウィーン絵文書裏面 Códice Vindobonensis reverso	ティラントンゴ王朝史 900年～1400年頃
3	ナットール絵文書表面 Códice Nuttall anverso	ミシュテカ高地王朝史 900年～1350年頃
4	ナットール絵文書裏面 Códice Nuttall reverso	「8の鹿」王伝記 1000年～1100年頃
5	ボドリー絵文書表面 Códice Bodley anverso	ティラントンゴ王朝史 900年～1521年頃
6	ボドリー絵文書裏面 Códice Bodley reverso	ミシュテカ高地王朝史 900年～1521年頃
7	コロンビーノ＝ベッカー絵文書 Códice Colombino- Becker	「8の鹿」王伝記 1000年～1100年頃
8	セルデン絵文書 Códice Selden	ハルテペック王朝史 900年～1556年頃

表1 ミシュテカの絵文書

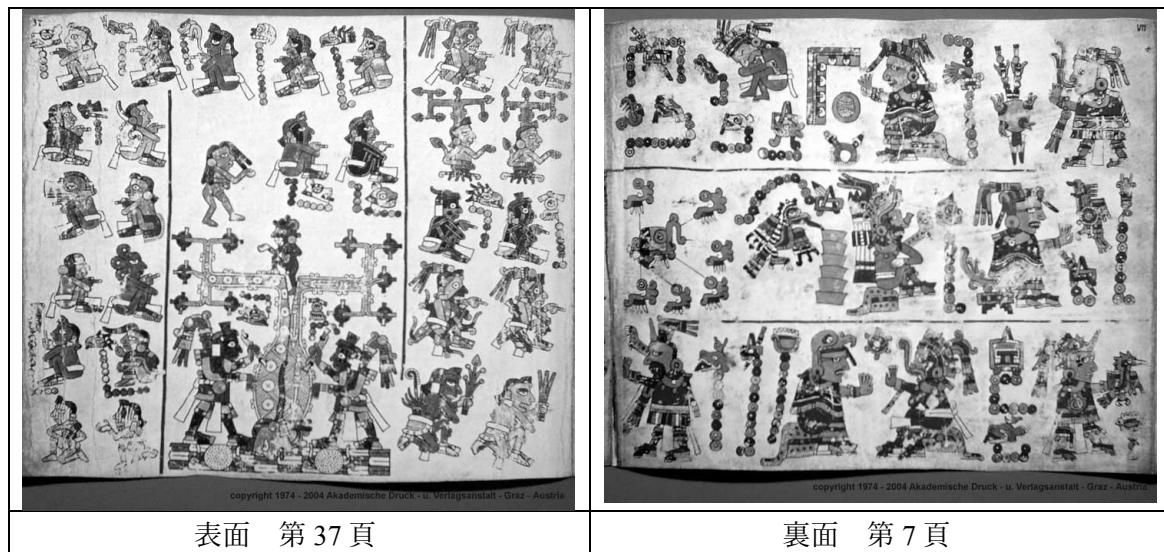


図1 ウィーン絵文書